

干潟の名称	小湊浅所
干潟の所在地	青森県東津軽郡平内町浅所
干潟の面積	最大で46haほど
干潟の地形タイプ	河口に位置する前浜干潟
干潟の底質	砂質で、場所によっては礫が混じる
干潟植生	干潟の周囲にはほとんど植生はないが、一部にヨシが生育。汐立川の両岸は、幅は狭いもののヨシ原が成立している。
干潟の特徴	汐立川の河口部に発達した干潟で、北側には漁港がありコンクリート護岸となっている。また、雷電橋の北側すぐのところにハクチョウの餌付け場があり、岸边は階段状に整備されている。このすぐ沖側に小面積のヨシ原があるが、ヨシ原と岸边のあいだの底質は、ハクチョウに与える餌のため、有機物汚染が進んでいる。この場所を除けば、ほとんどが砂質の干潟であり、ところによって礫がまじる。汐立川は河口の南岸にそって流れており、その北側に干潟が出現する。大潮干潮時には汐立川本流内に中洲が出現する。
生物相の特徴	表層にはホソウミニナが多く、アナジャコ類の巣穴も多く観察される。底土中には多様な多毛類が生息しており、ヒモイカリナマコも比較的多く産する。貝ではイソシジミやソトオリガイが多い。
調査者氏名	鈴木孝男、武田 哲、内野 敬
調査年月日	2002年7月9日

干潟の名称	小川原湖湖沼群（鷹架沼）
干潟の所在地	青森県上北郡六ヶ所村鷹架
干潟の面積	合計で20ha程である。
干潟の地形タイプ	河口干潟
干潟の底質	砂質から砂泥質
干潟植生	干潟の陸域にはヨシ原が広がる。この中にシバナやヒメハリイが部分的に混生する。ヨシ原の干潟寄りから干潟上部にかけてのところには、コアマモが生育している。
干潟の特徴	鷹架沼本体の東側に、通水路的な小さな沼が連結しており、この沼の東端に近い部分の北側がむつ小川原港に開口している。この小さな沼の東側半分の両岸と、行き止まりになっている沼の東端に、干潟が出現する。おおむね砂質であるが、場所によっては砂泥質となる。特に干潟上部に発達するコアマモ群落中の底質はいくぶん還元的である。干潟の下部は水流によって削られるため、少し段差を持っている。干潮時には、地元の人たちがシジミ採りに入っている。
生物相の特徴	コアマモ帯の中をカワザンショウガイが多く這い回っている。底土中にはヤマトカワゴカイもしくはヒメヤマトカワゴカイ、イトゴカイ、イソシジミ、ソトオリガイが多く、カラスガイの死殻も多く存在する。スナウミナナフシの1種（ <i>Cyathura</i> 属の1種）も比較的多く、ヨシ原にはアカテガニが生息する。
調査者氏名	鈴木孝男、武田 哲、内野 敬
調査年月日	2002年7月10日

干潟の名称	小川原湖湖沼群（高瀬川）
干潟の所在地	青森県上北郡六ヶ所村
干潟の面積	河口の岸寄り（主に左岸）に全体で0.5haほど
干潟の地形タイプ	河口干潟
干潟の底質	砂質で比較的硬くしまっている。部分的に泥分が混じるところもある。表層付近は比較的還元的である。
干潟植生	岸沿いにヨシ原が発達しており、カサスゲ、ウキヤガラ、シバナなどが混じる。A地点潮上帯にはウミミドリが生育する。
干潟の特徴	左岸のもっとも干潟が出現する地点（B, C地点）では、観光シジミ採りが行われており、六ヶ所漁協が管理している。シジミ採りは主に河道に近い潮下帯の部分で行われており、ここにはシジミが放逐されているようである。干潟は岸寄りに出現するが面積は狭く、せいぜい岸から30mほどのところまでしか干出しない。また、小さな流れがヨシ原を通して所々に入っている。A地点では、岸から20mほどが干出するが、人為的に掘り起こされたあとが多くみられた（おそらく釣り餌用のゴカイ採り）。小川原湖の岸边には干潟はほとんど出現しない。
生物相の特徴	干潟生物相の特徴：全体的に種類組成は貧弱であり、ヤマトシジミ以外の貝類は見あたらない。多く棲息しているのは、 <i>Notomastus</i> 属の1種とヤマトカワゴカイもしくはヒメヤマトカワゴカイである。また、スナウミナナフシ類（ <i>Cyathura</i> 属の1種）が表層近くに棲管を形成して多く棲息しており、アリアケモドキが底土表面に比較的多くみられる。アナジャコ類の棲管の中にピリンゴが入っているのが確認された。ヨシ原内にはカワザンシヨウ類とヒメハマトビムシが多く、また、クロベンケイガニも棲息している。A地点にはヨコヤアナジャコが多い。
調査者氏名	鈴木孝男、内野 敬、武田 哲
調査年月日	2003年6月14日

干潟の名称	陸中リアス海岸 宮古湾津軽石川河口（金浜）
干潟の所在地	岩手県宮古市金浜
干潟の面積	約9.8ha
干潟の地形タイプ	河口干潟
干潟の底質	砂泥質～砂質～礫まじりの砂質～礫
干潟植生	上流部に若干の塩性植生
干潟の特徴	津軽石川河口域から宮古湾奥に位置する、陸中リアス海岸で最大規模の干潟。干潟の地形タイプは河口干潟と分類したが、宮古湾奥の前浜干潟に連続した混合タイプと捉えたほうが妥当かもしれない。海側の低潮位は基本的には砂質で、高・中潮位ではこれに礫が混じる。砂泥質域は上流側に認められ、やや還元的である。従って、上流側から海側への幅広い塩分勾配に底質環境の異質性が加わり、多様な生息環境が提供されている。アサリ漁場として活用されて放流もなされているので、移入種の問題等が懸念される。植生は極めてまばらであるが、上流の潮上帯にはハマニンニクあるいはハマムギを主体とした小規模な群落が認められる。津軽石川右岸にも面積約2.3haの河口干潟が、河口より東へ約1.2キロの地点（赤前）には面積約2.7haの前浜干潟が発達し、後者はより海浜性の強い環境を提供している。
生物相の特徴	二枚貝、特にソトオリガイやオオノガイが比較的多く認められた。オオノガイは中・上流の低い場所（B2、B3 および C2）に出現し、ソトオリガイはオオノガイよりも高い地点で見出される傾向があった。腹足類では、コードラート外からではあるが、サキグロタマツメタが採集され、アサリとともに持ち込まれた可能性がある。甲殻類のスナモグリ・アナジャコ類は、山田町織笠川河口干潟に比較すると少ない。ヨコヤアナジャコは確認できなかったが、この点については精査が必要である。礫が多い地点では付着性の底生動物（ハウザワイソギンチャクやフジツボ類など）も認められ、底質に藻類が生育した地点では等脚類、特にヘラムシ科の複数種や端脚類のヨコエビ類を中心とした小型甲殻類が多く出現した。また、寄生性の等脚類（未同定）がスナモグリの鰓室に見出された。上流地点では出現種数が減少し、カワザンショウ類（ <i>Assimineae</i> 属の1種）、イソシジミ、ソトオリガイなどの中鹹水域を特徴づける種類が多くを占めた。
調査者氏名	松政正俊、内野敬（東北大院）、松政尚子、松政里玖
調査年月日	2002年8月9日

干潟の名称	松島湾
干潟の所在地	A 波津々浦：宮城県桃生郡成瀬町宮戸 B 陸前富山：宮城県宮城郡松島町手樽 C 櫃ヶ浦：宮城県宮城郡利府町赤沼
干潟の面積	A：6ha B：4ha C：4ha
干潟の地形タイプ	入江の中の前浜干潟
干潟の底質	A：砂質 B：泥質 C：砂泥質
干潟植生	干潟の周囲にはほとんど植生はない。波津々浦では、コアマモが少しみられる程度。櫃ヶ浦の奥まったところには、道路の向こう側にヨシ原が広がっており、スゲ類が混じる。ここには、干潟の南側にそって、直径50cmほどのパイプが通っており、このため海水の出入りがいくらかはあるようだ。
干潟の特徴	松島湾内には、大小様々な干潟が点在する。そのほとんどは、複雑な地形の入江の多くに形成されるが、岸に沿いにも幅は狭いもの前浜干潟が出現する。その一部は春先に潮干狩りの場として、県民に親しまれている。湾の奥まったところでカキやノリの養殖を行っている所の近辺の干潟は、かなり泥質であり歩行の困難な所が多い。水の交換が比較的好い所は、砂質から砂泥質の干潟となる。生物生息場所としてみた場合、局所個体群が点在して、相互に関係を保っているような配置であり、底生動物の生態分布やその動態に関心が持たれる。
生物相の特徴	今回は、代表的な3地点を取り上げて調査を行ったが、それぞれの出現種組成は異なる。陸前富山周辺の泥干潟にはホソウミニナが多く、ところどころにカキ礁が形成されている。泥中はオキシジミと <i>Heteromastus</i> 属の1種ぐらいで、生物種は貧弱である。波津々浦は外界に面した入江の奥にあり、潮干狩りもさかんで、アサリを主に採っている。この干潟にはアナジャコ類、ニホンスナモグリ、テッポウエビなどが多く、****も生息しており、多様性の高い干潟である。櫃ヶ浦にはホソウミニナ、ウミニナ、フトヘナタリ、カワアイが生息している。陸側の地高の高い所はコメツキガニやアシハラガニ、海よりにはヤマトオサガニが多い。
調査者氏名	鈴木孝男、内野 敬、宮島祐一
調査年月日	2002年5月28日

干潟の名称	松川浦
干潟の所在地	福島県相馬市 A 鶺の尾岬の南西側 B 宇田川河口(岩子) C 大洲
干潟の面積	最大 350ha 程 (のり棚の下の干出部分も含めて)
干潟の地形タイプ	潟湖干潟
干潟の底質	岸边はおおむね砂質から砂泥質であるが、奥まったところには泥分がいくらか多い干潟が出現する。
干潟植生	干潟の周囲は、ほとんど護岸工事がなされており、一部にヨシ原がみられる程度である。しかし、宇田川河口周辺には、まとまったヨシ原が広がっている。ところにより大潮干潮線付近にはアマモの生育が見られる。
干潟の特徴	松川浦は、南北 5km、東西の幅 1km を超す全体的に浅い潟湖である。北端の港部分で太平洋とつながっている。松川浦全体でノリの養殖が行われており、ノリヒビが林立している。また、春には潮干狩りが盛んで、多くの人を訪れる。大潮干潮時には細い水路を残してかなりの面積が干出する。宇田川、小泉川が松川浦に開口する辺りは砂質であるが、他の干潟はほとんどが砂泥質であり、ところによっては泥分が多めのところも存在する。流入河川としては、他に、梅川や日下石川が松川浦の南奥に注いでいる。
生物相の特徴	宇田川の河口付近のヨシ原よりにはハサミシャコエビの塚が多くみられ、チゴガニ、アシハラガニ、ヤマトオサガニが生息している。ヨシ原内には、フトヘナタリやカワザンショウ類が多い。砂質域に多いのはイソシジミやホソウミニナであるが、ホソウミニナはどの場所でも極めて多い。北東端(鶺の尾岬の松川浦側)では、ニホンスナモグリ、テッポウエビが多く生息している。一方、南端(大洲)にはカキ礁がみられ、ヤマトカワゴカイもしくはヒメヤマトカワゴカイ、ミズヒキゴカイ、イトゴカイなどの多毛類が優先し、ヤマトオサガニも見られる。
調査者氏名	鈴木孝男、内野 敬、宮島祐一
調査年月日	2002年5月30日

干潟の名称	鵜住居川
干潟の所在地	岩手県釜石市鵜住居町
干潟の面積	約 0.8ha (ヨシ原を含む)
干潟の地形タイプ	河口
干潟の底質	河口付近は主に砂, 中・上流で砂泥〜泥
干潟植生	ヨシ
干潟の特徴	鵜住居川は根浜海岸と平行に 800m ほど北流して大槌湾奥部に注ぐ。そうした河川形態から, 本干潟は三陸リアスの湾奥干潟群では最も淡水の影響を強く受けるものと推定される。底質は河口部から上流 500m ほどまで (調査地点 A と B) は砂質, 上流 800m ほど (調査地点 C) では砂泥質ないしは泥質が主である。ヨシ原は河口部左岸と河口から約 800m 上流の右岸に認められる。本水域は, サケ漁のために毎年秋に掘削され, 干潟の一部が定期的に消失・攪乱される。今回の調査時には, 河口から上流 500m ほどまでと, 上流約 800m の地点のヨシ原前縁に干潟が認められたが, 春から夏にかけては, これらの地点の間にも干潟が形成されるものと思われる。
生物相の特徴	河口部の A 地点は小型の甲殻類 (端脚類および等脚類) で, 500m ほど上流の B 地点はイソシジミ, ヤマトカワゴカイもしくはヒメヤマトカワゴカイ, およびヨコヤアナジャコで特徴づけられた。これに対して, 河口から 800m ほど上流の C 地点はカワザンショウ類 ( <i>Assimineae</i> 属の 1 種), イトメ, アリアケモドキといった貧鹹水域 (汽水で比較的塩分が低い水域) を特徴づける生物が多く出現した。すなわち, 本水域は貧鹹水域の生物群にとっての良好なハビタットを内包しており, これは三陸リアス湾奥の他の水域 (宮古湾津軽石川河口や山田湾織笠川河口) では認め難いものである。一方, 出現種数は他の水域に比較して少ないが, これが塩分環境によるものか, あるいは攪乱やその他の物理的要因等によるものかは今後検討する必要がある。
調査者氏名	松政正俊, 松政尚子, 今野泰史
調査年月日	2003 年 9 月 12 日

干潟の名称	陸中リアス海岸 山田湾織笠川河口
干潟の所在地	岩手県山田町織笠
干潟の面積	約3.8ha
干潟の地形タイプ	河口干潟
干潟の底質	砂泥質～砂質～礫混じりの砂質
干潟植生	右岸海側にアマモ場。左岸上流部に若干のヨシ。
干潟の特徴	織笠川の河口に広がる、山田湾内では最大規模の干潟。底質の空間的異質性に加え、右岸海側にアマモ場が発達することによって、様々な生息環境がコンパクトに配置されている。塩分環境の空間的变化も顕著であるが、貧鹹水域は不明瞭ないしは欠落している。アサリ漁場として利用され、放流もなされているので移入種の問題が懸念される。山田湾内の河口干潟としては、関口川河口（織笠川河口より北に約2キロ）にも小規模なものが存在し、やはりアサリ漁場として利用されているものもアサリの放流はなされていない。また、織笠川河口より沖合い約1キロの小島西岸には砂質の前浜干潟が発達しており、人為的な影響が少なく、コタマガイ、エゾタマキガイなどの海浜性の種類が見られる。
生物相の特徴	甲殻類、特に十脚甲殻類のスナモグリ類、アナジャコ類が多い。スナモグリ類は海側の砂および砂泥質から、アナジャコはスナモグリよりもやや上流側まで広く見出され、ヨコヤアナジャコは礫の多い低潮線付近（B3）に出現した。上流の陸側の地点（C2 および C3）では淡水の影響が強いためか、スナモグリ類やアナジャコ類は認められず、出現種数が減るとともに、その構成は二枚貝のイソシジミや甲殻類・端脚目のニホンドロソコエビなどの低塩分耐性が高い種類で特徴づけられた。海側の地点では****の幼魚が多く見られ、底生動物の巣穴内に入り込んでいるのが観察された。また、干潟内の潮だまりやアマモ場周辺にも小型の魚類が多く見られた。本干潟の底生動物に関しては Mukai (1992) があり、スナモグリ・アナジャコ類の現在の密度は 1986～1988 年に比較すると低下していると思われる。Mukai (1992) はコアマモの生育が季節的に見られると報告しているが、今回の調査では確認できなかった。
調査者氏名	松政正俊、内野敬（東北大院）、内田明（山田町水産専門員）、松政尚子、松政里玖
調査年月日	2002年8月8日



干潟の名称	長面浦
干潟の所在地	宮城県河北町
干潟の面積	約 12ha
干潟の地形タイプ	潟湖
干潟の底質	砂，潟奥部で礫や泥が混じる
干潟植生	ヨシ，シオクグ，アマモ，コアマモ
干潟の特徴	長面浦は，北上川河口の南約 1.5Km で追波湾に開口している潟湖干潟である。開口部と楕円形の奥部（長径約 1.5Km，短径約 1Km）は，幅約 100m，長さ 1Km 程の水路で連結されており，干潟のほとんどはこの水路部および奥部への連結部に集中している。奥部の干出面積は少ないものの，岸边に沿って狭い干潟が形成され，ヨシ原を伴うことが多い。また，水路部の干潟は砂質であるのに対し，奥部の干潟は礫や泥が多く混じる。水路部の砂質干潟はアサリ漁場として，最奥部の潮下帯はカキの養殖場として利用されており，カキ養殖場の周辺にはアマモやコアマモの群落が認められる。河川を伴わず，淡水の流入量は少ない。
生物相の特徴	多鹹水域（汽水で比較的塩分が高い水域）を特徴づける生物が主に出現し，河川を伴わないことから，潟湖全体の塩分環境の勾配は比較的緩やかであると考えられる。ただし，上述の潟湖形態に対応した生物相の変化が，海への開口部から奥部にかけて認められる。開口部付近の砂干潟（A 地点）は二枚貝のイソシジミと甲殻類のコメツキガニで特徴づけられ，特に後者の密度は高い。水路部の砂干潟（B 地点）では巻貝のホソウミニナ，多毛類のチロリやイトゴカイの仲間の密度が高くなるとともに，二枚貝のアサリやソトオリガイ，甲殻類のニホンスナモグリが多く見られるようになる。また，海藻類もこの地点で多い。奥部の礫や泥が混じる干潟（C 地点）では，巻貝のカワザンショウ類（ <i>Assimineae</i> 属の 1 種）とホソウミニナや，多毛類の複数種の生息密度が高い。このような生物相は隣接する北上川の河口域では発達しておらず，その対照的な状況は興味深い。
調査者氏名	松政正俊，鈴木孝男，内野敬
調査年月日	2003 年 7 月 28 日

干潟の名称	北上川河口
干潟の所在地	宮城県北上町，河北町
干潟の面積	約 950ha (ヨシ原を含む)
干潟の地形タイプ	河口
干潟の底質	河口付近は主に砂や砂泥，中・上流は主に泥や礫
干潟植生	ヨシ，アイアシ，オギ，シオクグ，マコモ，ヤナギ
干潟の特徴	北上川は岩手県を南流して岩手県北部の追波湾に注ぐ東北随一の大型河川である(流域面積：10150Km <sup>2</sup> ，幹川流路延長：249Km)。その河口から上流 17.2Km の地点には北上大堰が設置されているため，塩水の遡上は北上大堰までである。その下流域は広大な潮間帯を有し，9割程度がヨシ原で覆われている。海側(調査地点 A や B)には砂質干潟が認められるが，上流にむかうと砂泥一泥干潟が主となり，さらに上流域では礫底も多く見られるようになる。塩水は大堰まで遡上するが，河川の最表層水の塩分は一般に低く，潮間帯上部は低塩分に曝されることが多いと考えられる。ただし，潟水時には海側の上層水の塩分濃度も 20PSU を越える。ヤマトシジミの漁場として活用(鋤簾および手掘り漁)されるとともに，ヨシの一部も刈り取られて屋根材等に利用されている。
生物相の特徴	ヤマトシジミ，イトメ，アリアケモドキといった貧鹹水域(汽水で比較的塩分が低い水域)を特徴づける生物が多く出現し，隣接する長面浦とは異なる生物相を示す。貧鹹水域の一般的特徴に従って，1 調査地点あたりの出現種数は少ないものの，それぞれの種の個体数・現存量は高い。このような貧鹹水的感潮域が広く残されている地域は少なくとも東北では稀である。ただし，海側の砂干潟(A 地点)にはコメツキガニが見られ，予備調査時にはイソシジミやアサリが認められたことから，河川水量との関係で多鹹水的な生物相が形成される場合もあると考えられる。中一上流の砂泥および泥干潟はイトメとアリアケモドキ，ヨシ原はカワザンショウ類( <i>Assimineae</i> 属の 1 種)で特徴づけられ，予備調査時には希少種と考えられるミズゴマツボ科の <i>Stenothyra</i> 属の 1 種が採集されている。また，現在までのところ北上川河口のチゴガニは北限の個体群であると考えられ，生物地理学的にも興味深い水域である。
調査者氏名	松政正俊，鈴木孝男(7月)，内野敬(7月)，今野泰史(8月)，相澤英昭(8月)
調査年月日	2003年7月29日，8月28日

干潟の名称	万石浦
干潟の所在地	宮城県石巻市、女川町
干潟の面積	大浜地区 35ha ほど、アサリ漁場が 70ha ほど
干潟の地形タイプ	内湾の岸辺に前浜状に発達
干潟の底質	砂質ないしは砂泥質で、場所によっては礫がまじる
干潟植生	内湾一帯にほとんど植生はない。ほんのごく一部にヨシとハマツナが生育している。
干潟の特徴	内湾一帯で牡蠣の養殖が行われており、北岸と東岸は護岸工事がなされている。岸辺に干潟がでるのは南側の大浜地区のみであるが、内湾南西側のアサリ漁場として盛り土したところは干潟になる。大浜地区においてもアサリ漁場が多くを占め、潮干狩り場として管理運営されている。一般に開放されている潮干狩り場ではアサリの放逐も行われており、人為の加えられていない干潟部分はきわめて少ない。干潟にはカキ礁も点在する。
生物相の特徴	アサリの放逐に伴って移入されたサキグロタマツメタが干潟一帯で繁殖しており、アサリ漁業に被害を与えている。表層にはホソウミノナやマガキが多く、底土中にはオキシジミやコケゴカイ、コアシギボシソメが普通にみられる。岸辺にはタマキビやイシダタミが多い。岸辺に近い干潟表面には小さなカワザンショウ科の 1 種 ( <i>Assiminea</i> 属の 1 種 (A)) が多産する。またカワアイが多く生息している場所がある。水路近辺にはマメコブシガニが多い。海水交換の良いアサリ漁場の干潟には比較的多くの底生動物が生息している。
調査者氏名	鈴木孝男、内野 敬、野畑 英
調査年月日	2003 年 6 月 2 日

干潟の名称	蒲生
干潟の所在地	宮城県仙台市宮城野区蒲生
干潟の面積	3ha
干潟の地形タイプ	潟湖干潟
干潟の底質	干潟はほとんどが砂質であるが、ところによっては砂泥質となる。導流堤から潟内（北）に150m程入ったところの東側にある入江と、導流堤から400m北側よりも奥の潮下帯部分には軟泥が堆積している。また、潟の西側にある養魚場との間に広がるヨシ原の底土は泥質である。導流堤の外側（七北田川河口域部分）は砂質で、かなり流動的であり、地形は頻繁に変化する。
干潟植生	潟の周囲一帯はヨシ原におおわれており、ところにより潮間帯下部ではシオクグが混じる。潟の西側にはまとまったヨシ原が存在するが、東側（海側）のヨシ原は幅が狭い。潟の北側奥の方は高波時に越流水が砂を持込むため、部分的にヨシ原はとぎれている。局所的ではあるが、シバナも生育している。
干潟の特徴	仙台市の北部を流れる七北田川の河口北側に発達した干潟である。蒲生潟の南端には導流堤が設けられており、3基の水門を通して潟水の交換がなされている。七北田川河口部では、波による砂の堆積がおこり、河口が浅くなりがちであるため潟水の抜けが遅く、潟内の最干潮時刻は2時間程度遅れることが多い。現在の水門は1998年に改修されたものであり、以前に比べて海水の入りは良くなっているようだ。導流堤の河口側は、波が入ることもあって流動的であり、地形の変化も大きいため、今回の調査対象とはしなかった。導流堤から220m程北側のあたりは潟の幅が狭くて浅くなっており、このため潟の中央部から北側奥にかけてのほとんどの領域は、干出することがなく、黒色軟泥の堆積している場所が多く見られる。北側奥の東岸には、狭いがまとまった干潟が出現する。この部分や北側一帯の潮下帯にはオゴノリが繁茂している。仙台市民の憩いの場所となっており、人の立ち込みの多い干潟である。
生物相の特徴	全体として、ヤマトカワゴカイもしくはヒメヤマトカワゴカイとイソジミの優占する干潟である。他には、ヤマトスピオ、 <i>Pseudopolydra</i> 属の1種、 <i>Heteromastus</i> 属の1種、サビシラトリ、ソトオリガイが比較的多く出現する。近年、潟水の交換が良くなり、海水の入りが良くなってきたことを反映してか、アサリが少し増えたようだ。また、潮下帯においては近年 <i>Capitella</i> 属の1種が多く出現するようになった。カニ類ではアシハラガニが優占する他、コメツキガニ、チゴガニ、ヤマトオサガニが普通に見られるが、アリアケモドキやトリウミアカイソモドキも出現する。砂質域にはヨコヤアナジャコが生息している。導流堤から潟に入ってすぐの西岸はコンクリート護岸となっているが、そこにはマガキが付着し、タマキビが生息している。ヨシ原内にはカワザンショウ類が多く、またフトヘナタリも比較的多く認められる他、局所的ではあるが、ウミニナが少数生息している。
調査者氏名	鈴木孝男、内野 敬、狩野圭市
調査年月日	2004年5月22～23日

干潟の名称	井土浦
干潟の所在地	宮城県仙台市若林区藤塚
干潟の面積	17ha
干潟の地形タイプ	潟湖干潟
干潟の底質	名取川河口部に近い一帯は砂質域であるが、中央部に出現する広大な干潟や奥部の干潟は泥質である。特に水際に近いところは軟泥質であり、非常にぬかるむ。砂質域で、アナジャコやスナモグリが多く生息する干潟は凸凹が多い。また、泥質域でも、比較的地高の高いところには砂が混じり、底質はしまっている。
干潟植生	潟の周囲一帯はヨシ原におおわれているが、名取川河口に近い方（南部）と北側の奥まったところにまとまったヨシ原が成立しており、部分的にシオクグが混じる。
干潟の特徴	名取川河口のすぐ北側に立地する干潟である。井土浦の西側（陸側）に沿って貞山堀が掘削されているため、井土浦に入るには船やボートが必要となる。このため、人が立入ることは少なく、潟湖干潟の原風景をとどめている。また、周辺の他の干潟に比べて、ゴミの散乱は少ない。潟は、南端で名取川河口部に開口するとともに、北西端に近いところで、貞山堀に開口している。この近くには、井土浦川の水門があり、干潮時には河川水が流れ込んでいる。大潮干潮時には、狭い水路を残して、大部分が干出する。
生物相の特徴	南側の砂質干潟には、ニホンスナモグリやヨコヤアナジャコ、コメツキガニが多く、イソシジミやソトオリガイも生息している。また、水路に面したところにだけ、ホソウミニナが生息している。しかし、井土浦干潟の主体をなす泥質干潟では、ヤマトオサガニとイトゴカイ類が優占し、サビシラトリガイ、ソトオリガイが比較的多く出現する。潮間帯上部には、チゴガニ、アシハラガニが多い。ヨシ原にはアシハラガニとカワザンショウ類が多く、局部的にフトヘナタリが見られる。
調査者氏名	鈴木孝男、内野 敬、狩野圭一、藤川 護
調査年月日	2004年5月8～9日

干潟の名称	広浦
干潟の所在地	宮城県名取市閑上（ゆりあげ）
干潟の面積	20ha
干潟の地形タイプ	潟湖干潟
干潟の底質	砂質から砂泥質であるが、干潮時の水際付近や中洲の一部には泥質のところもある。アナジャコやニホンスナモグリが多く生息する干潟では、底質は凸凹であり、砂質であっても柔らかく、ぬかるむ。
干潟植生	潟の東岸沿いの北側半分には、遊歩道に沿ってその干潟側にヨシ原が立地するが、幅は狭く、ゴミの打上げが多い。西側の干潟の潮間帯上部にも土手下に張り付くようにして、狭いヨシ原がある。また、潟の南側で中洲に続くところにはまとまったヨシ原が発達している。
干潟の特徴	名取川河口のすぐ南側に閑上漁港があるが、その南側に接続して広浦が存在する。2001年9月に漁港の航路が直接仙台湾に開かれ、それまで名取川河口部に開口していた航路は12月に締め切られた。このため海水交換は以前よりも良くなったと考えられる。一方、潟の西南では貞山堀とつながっており、そこに増田川が流入している。このため、淡水の供給も多い。潟の東岸、西岸、ならびに中央には平坦な干潟が出現する。航路が掘られているためか、最干潮時を過ぎると潮の上げ方は早く、干潟の干出時間はそれほど長くはない。北側の両岸にはコンクリートの階段が設置されており、ボートの繫留場所になっている。また、東岸沿いには遊歩道が整備されている。
生物相の特徴	全体的に単調であり、東岸、西岸、ならびに中央干潟で、出現種組成に大差はない。砂質から砂泥質のところにはスナモグリが多く生息しており、より低いところにはヨコヤアナジャコも多い。人の立入りはほとんどなく、ニホンスナモグリの作った凹凸が多くみられ、底質は柔らかい。泥分の多いところには、ヤマトオサガニが多く分布する。イトゴカイ類（ <i>Heteromastus</i> 属の1種）以外の多毛類は少ない。二枚貝では、イソシジミが優占し、ソトオリガイが混じるが、泥分の多いところにはサビシラトリが出現する。巻貝では、ウミニナが局所的に分布している。ヨシ原には、アシハラガニとカワザンショウ類が多く、極めて狭い範囲ではあるがフトヘナタリも生息している。
調査者氏名	鈴木孝男、金谷 弦、野畑 英、狩野圭市、藤川 護
調査年月日	2004年4月21～22日

干潟の名称	鳥の海
干潟の所在地	宮城県亶理郡亶理町
干潟の面積	60ha
干潟の地形タイプ	潟湖干潟
干潟の底質	ほとんどが砂質であるが、北側の干潟では泥分が混じる。また、潮間帯下部の水際付近には泥底のところもみられる。ニホンスナモグリが多く生息する干潟では、底質の凹凸が大きく柔らかい。
干潟植生	潟の東側で仙台湾との通水路の南側にはヨシ原が発達している。他は全て護岸工事がなされており、干潟に連続する塩性湿地はほとんどが失われている。ところどころでシオクグが混生する。
干潟の特徴	潟の中央に蛭塚という陸地があり海浜公園となっている。その周りど、潟の岸边には広く干潟が出現する。蛭塚の東側と潟の南側ではアサリの潮干狩りが行われている（2004年に、5年ぶりに解禁された）。通水路で直接仙台湾と結ばれており、通水路を入れてすぐ北側には荒浜漁港がある。流入する河川は大小含めて7本ほどあるが、それぞれに水門が取り付けられている（潮受け堤防）。潟の周囲はほとんどが護岸されており周回道路が整備されている。
生物相の特徴	干潟生物相の特徴：全体的に単調であり、砂質域にはニホンスナモグリが多く生息している。貝類で優占するのはアサリ、イソシジミであるが、すこし泥分が多いところにはサビシラトリが多く生息している。また、ホソウミニナが東側半分くらいに多く、ウミニナも少数ではあるが生息している。他にはイトゴカイの仲間 ( <i>Heteromastus</i> 属の1種) が全域にわたって分布している。干潟を見回すとたくさんの穴が見られるが、これらはほとんどがニホンスナモグリとアナジャコ類の巣穴である。泥質のところにはヤマトオサガニの巣穴も多く見られる。ヨシ原内にはアシハラガニとカワザンショウ類が多く生息するほか、フトヘナタリが局所的に比較的高密度で生息する。
調査者氏名	鈴木孝男、内野 敬、藤川 護
調査年月日	2004年4月10～11日